

新約聖書の書簡文学*

山田耕太

1. 始めに

新約聖書の書簡は、新約聖書の諸書が集められて正典化されていく過程の中で、パウロの名前で書かれた13通にヘブライ書を加えた14通の書簡が「パウロ書簡」という概念でまとめられ、それら以外の7通の書簡が「共同書簡」という概念でまとめられていった。¹その後、宗教改革期以降にヘブライ書はパウロ以外の人物によって書かれたという見解が定着して、²「パウロ書簡」から外された。19世紀以降には「パウロ書簡」の中でも、真正のパウロ書簡と偽名のパウロ書簡が区別されていき、³またパウロ書簡を代表にして、新約聖書の書簡が文学であるのか否かが問われてきた。

本稿では、19世紀末から21世紀初頭までの研究史を概観しながら、そのジャンルを問うことにしたい。とりわけ、20世紀の研究に支配的であった様式史や編集史などの伝承史的研究を決定的に方向づけた、フランツ・オーファベックとアドルフ・ダイスマンのテーゼを現代の視点から問い質して、新約聖書の書簡が古代ギリシア・ローマ文学史の中で、どのように位置づけられるのか、新たに形成されてきた共通理解を提示したい。

2. フランツ・オーファベックのテーゼ

オーファベックは、チュービンゲン学派のF.C.パウルの影響を受けつつも、ヘーゲル哲学の影響を受けない純粋に歴史学的な原始キリスト教史を構築し、聖書学と教父学を視野に入れた世俗的な教会史の構築を目指していた。⁴とりわけ、「教父文学の起源について」の中で様式史に基づいたキリスト教的文学史を構想し、「文学」(Literatur)や「歴史」(Geschichte)と区別して「原文学」(Urliteratur)と「原史」(Urgeschichte)というカテゴリーを設けて、1世紀に書かれた新約聖書は「原始キリスト教」(Urchristentum)を表現する文学以前の「原文学」(Urliteratur)であるとし、ギリシア・ローマ文学と連続した2世紀半ば以降の教父学という「文学」(Literatur)とは区別した。その中で新約聖書の手紙は「使徒的書簡」で、文学的技法が用いられた「文学的書簡」とは区別された「現実的書簡」であり、公的な書簡ではなく、個人的

な書簡であるとした。しかし、パウロ書簡から公同書簡に進むに連れて普遍的な内容が取り扱われていき、さらに書簡から福音書・使徒言行録・黙示録に進むと、それらはキリスト教文学の始めの「キリスト教的原文学」(christliche Urliteratur)であり、使徒教父文書やヘゲシッポスの覚書やパピアスの注解などもそれらに属するとした。⁵

オーファベックの親しい友人であり、ギリシア古典の文献学者で哲学者のF.ニーチェは、原始キリスト教が低い社会層による、文学以前の段階であるというオーファベックの区別を前提にして、『道徳の系譜』で原始キリスト教はローマ社会の最下層の奴隷の宗教であり、それは奴隷階層のルサンチマン感情から生じて発展したと主張した。⁶

3. アドルフ・ダイスマンのテーゼ

19世紀末から20世紀初頭に掛けてダイスマンは、19世紀に新たに発見されたパピルスの手紙や碑文などによって、新約聖書の書簡がパピルスに書かれた民衆の言葉のコイナーで書かれていることを明らかにし、さらに、オーファベックのテーゼを展開して、文学以前の真正で実際の私的な「手紙」(Brief)と、文学形式と修辞学的技巧を用いた公的な「書簡」(Epistel)を区別した。⁷ この区別はギリシア・ローマ時代の哲学者や文学者の著作にも用いられ、アリストテレスやプラトンやエピクロスやキケロなどの「手紙」と、ハリカルナッソスのディオニュシオスやプルタルコスやセネカやホラティウスやオヴィディウスなどの「書簡」を区別した。⁸

また、この区別をパピルスと同じ文体で書かれた新約聖書にも適用し、パウロ書簡(I・IIコリント書、I・IIテサロニケ書、ガラテヤ書、コロサイ書、フィリピ書、エフェソ書、フィレモン書、ローマ書、牧会書簡)ならびにII・IIIヨハネ書は文学的でなく「手紙」であり、それに対して「公同書簡」(ヤコブ書、I・IIペトロ書、ユダ書、Iヨハネ書)とヘブライ書ならびにヨハネ黙示録は、特定の対象に宛てられたものではない公的な「書簡」であるとしたが、⁹ 新約聖書の書簡は本来の文学ではなく民衆の文学であるとした。¹⁰

このような原始キリスト教が比較的の低い社会層から始まったとする前提は、キリスト教の発生が革命家イエスによるプロレタリアート革命である、というK.カウツキーのマルクス主義的解釈や、¹¹ ニーチェやカウツキーほど極端ではないにしても、イエスやパウロに見られるように「原始キリスト教はその最初から特殊な職人的宗教性をもっていた」¹² というM.ヴェーバーの見解にも見られる。

4. 様式史的研究

これらのテーゼを前提にして、民衆社会における口碑伝承の形成・発展をモデルにした、旧約学者のH.グンケルの様式史研究の影響を受けて、福音書研究では共観福音書伝承の様式を問う様式史的研究が、M.ディベリウスやR.ブルトマンらによって始まった。¹³ 新約聖書全体に様式史的研究を推し進める中で、¹⁴ 書簡研究でも、特にパウロ書簡の様式を問う代表的な研究が、主として1930年代から60年代にかけて行なわれた。だが、福音書の様式史的研究では、伝承の社会学的背景として「生活の座」との関連で様式が考えられてきたのに対して、手紙の様式史的研究では、このような社会学的背景についての関心はほとんど注がれてこなかった。

O.ロウラーは、パウロ書簡の「前書きの挨拶」（差出人、受取人、祝福の挨拶）と「後書きの挨拶」（平和の挨拶、祝福の挨拶）の様式に着目して、パピルスの手紙の挨拶の様式と比較し、またパウロ書簡の挨拶の発展を跡づけて、それらを詳細に論じた。¹⁵

P.シューベルトは、「感謝」と「神の栄光」¹⁶ でもなく、「祝福」や「頌栄」¹⁷ でもなく、パウロ書簡の主として本体の冒頭に一樣に見られる「私は感謝する」(eucharistó) という文章に表される「感謝」の様式に注目し、それを初期キリスト教書簡、70人訳聖書、フィロン、エピクテートスとキケロ（ストア学派）、パピルスの手紙や碑文と比較して、一つの明確な「書簡の様式と機能」をもつことを明らかにした。¹⁸ また、それと関連して手紙の本体の冒頭と関係した「願い」や「打ち明け」に関する様式史的研究も行なわれた。¹⁹

C.J.ピエルケルトは、パウロ書簡の本体の末尾に多く見られる「私は勧める」(parakalô) という文章に表現される「勧告」に注目し、パピルスの手紙や碑文やギリシア・ユダヤの著作と比較して、それがギリシアに由来し、私的にも公的にも用いられることを明らかにした。また、パウロ書簡では、手紙の始めに用いられる場合では必ずしも勧告と結びついてはいないが、手紙の結びに用いられる場合には、冒頭の感謝の部分と対応して、勧告の部分への移行を意味することを明らかにした。²⁰ また、勧告の部分に関連して、「家督訓」²¹ や「徳と悪徳のカタログ」²² の様式史的研究も進められていったが、1970年代以降は様式史的色彩が薄れ、神学的アプローチや社会学・社会史のアプローチに移っていった。

これらの様式史的研究では、主に書簡の始めと終わりの部分の様式に関心が注がれてきたのではあるが、手紙全体に関しても様式史的研究の成果がW.ドティやJ.L.ホワイトらによってまとめられていった。²³ また、

M.L.スタイアワルトは、ギリシア・ローマ社会では書簡が公的書簡と私的書簡に分けられたが、パウロ書簡を公的書簡に分類し、ローマ書を哲学者の「書簡エッセイ」と分析したが、パウロ書簡を「導入部」「本体」「結論部」の様式に分ける分析は、様式史的段階を出てはいない。²⁴ さらに、1980年代以降にも、F.シュナイダー・W.シュテンガーやJ.A.D.ワイマらによって手紙の導入部と結論部の様式に関する研究が進められてきた。²⁵ しかし、手紙の本体を含めて、その様式に関心が注がれているとしても、手紙全体の構造への関心ではなく、その一部分のみであり、新約聖書の書簡の構造とその意味を解明することには至らなかった。

さらに、ベルガーは「新約聖書のヘレニズム的文学ジャンル」において、ジャンル分析全体の枠組みは修辞学的概念を用いているのではあるが、新約聖書の手紙は、一方では文学的な哲学者の「書簡」や「(ロゴス・)プロトレプティコス(勸奨の言葉)」の言葉と関係するが、他方ではさまざまな様式を含んだ文学以前のジャンルの「手紙」であることを指摘した。²⁶ 現在、世界的な標準となっているU. シュネルの『新約聖書緒論』は、各書簡の構造の分析で、手紙が「導入部」「本体」「結論部」という構造を成している、と見做す点において、まだこの様式史的分析の段階に留まっている。²⁷

5. 社会学的・社会史的研究

だが、1970年代以降に様式史・編集史などの伝承史的研究に取って替わって、社会学や社会史などの手法を取り入れた研究が盛んになっていった。社会層に関してもダイスマン以来の20世紀を支配していた「キリスト教は奴隷や手工業者という低い社会層から始まった」という見解が改められ、新しい共通理解が形成されていった。

E.A. ジャッジの論文は、20世紀前半のシカゴ学派²⁸ などに見られた社会学的関心を再び引き起こす端緒となった。最初期のキリスト教がローマ社会の「友情」(amicitia)と守護者と被護者のパトロン関係(clientela)を背景にした、「(比較的)社会層の高い」地方の後援者によって支援されて、「(比較的)社会層の低い」社会的に依存している人々に向けられた運動」であり、パウロの共同体に代表される教会は比較的)社会層の高い学びの共同体であり、必ずしも低い社会層だけで成るのではないことを示唆した。²⁹

G.タイセンは、ヴェーバーの社会学的視点から新約聖書を読み直して、イエス運動がユダヤ教の内部の改革運動である「ワンダーカリスマティ

カー」による「ワンダーラディカリズム」の運動であったがそれに対して、ヘレニズムの共同体ではパウロに代表される「共同体組織者」による運動へと転換していくと見做し、コリントの共同体の問題はワンダーカリスマティカーと教会組織者が衝突している問題であると見做した。また、パウロの共同体を構成する人々で社会層が推定される人々を解明していくと、会堂長クリスポ、市の財務官エラスト（後に造営官に昇進?）、会堂長ソステネ、教会の家主のガイオ、パトロンであった女性執事フェベなどの高い社会層の人々がいることを指摘した。そして、聖餐で分裂の原因となった富んでいる者と貧しい者、偶像に備えられた肉の問題での強い者と弱い者というコリントの共同体内の葛藤は、社会層の異なる人々の間の葛藤であることを指摘した。³⁰

W.A.ミークスは、タイセンの指摘をさらに拡大して、コリントの共同体の人々ばかりでなく、エルサレムのヨハネ・マルコとその母マリア、キプロス出身のバルナバ、ティアティラの紫布商人リディア、ポントス出身の天幕作りのアキラとプリスキラ夫妻、アレクサンドリアのアポロ、コロサイのフィレモンなどに見られるように、社会層の高い人々がパウロの共同体や協力者に数多く見られることを指摘した。³¹

これらの研究によって最初期キリスト教が必ずしも低い社会層から始まったのではないことが明らかにされた。また、編集史以降に新約聖書の著者（特に福音書記者）が伝承の継承者というよりも作家・神学者としてみなされるようになり、文学的技法や神学的思想に関心が注がれるようになった。

6. 書簡理論的研究

他方では、1950年代から1980年代にかけて、新約聖書の周辺世界の文学への関心が再び起こり、新約聖書の書簡とギリシア・ローマ時代の書簡理論やその実践に関する研究が行なわれていった。これらはダイスマン以来の書簡研究の再検討を促すものであった。

H.コスケンニエミは、ギリシア・ローマ時代の作家の手紙やパピルスの手紙の形式を研究するばかりでなく、それらの中で特徴的な表現様式と密接に関係した手紙の性質や理念をも探求した。その結果、ギリシア・ローマ時代の書簡で最も基本的な「友情の手紙」の機能は、次の3点のテーマにあることを指摘した。(1) 著者と受取人との「友情」を表現すること (philophronēsis)、(2) 著者と受取人のある期間の別離の後で著者の「存在」あるいは「再会」が期待されること (parousia)、(3) 著者と

受取人の対話によって交わりが続けられること (homilia)。このような視点は、手紙の目的が個人的な接触を保つことと情報を得ることにある、とした後の書簡理論家たちの理論へと展開していく。³²

K.トレーデは、コスケンニエミの研究を発展させ、第一部でキリスト教以前のデメトリオス、キケロ、オヴィディウス、セネカ、プリニウス、パピルス書簡、イアンプリコス書簡の書簡理論を分析し、第二部で新約聖書の「(著者の) 眼前での存在」(parousia) 論を分析し、第三部で教父の書簡理論の特徴的なトピックスとして、次の4点を挙げる。すなわち、(1)「体は離れているが、心は一つ」という一致、(2) 愛において結ばれていること (philia, agapē)、(3) 人格が眼前に現れて対話する機能 (parousia, homilia)、(4) 憧れと慰めと苦しみ (apousia, parousia, pathos) をテーマとする離れた者同士の対話である。こうして、「友情の手紙」に関してギリシア・ローマの著作家・新約聖書・教父の書簡理論の連続性と展開を指し示した。³³

社会学・社会史的研究により、様式史や編集史による研究に代わる新たな研究動向が生まれるのと関連して、1980年代に入り文学批評による新約聖書の書簡分析の新たな潮流が生まれてきた。その第一は、ギリシア・ローマ時代の書簡理論を用いた新約聖書の書簡の分析である。

A.J.マラーベは、コスケンニエミやトレーデが取り上げた偽デメトリオスの『書簡の類型』(Typoi Epistolikoi) や偽リバニオスの『書簡の文体的特徴』(Epistolimai Charaktères) を始めとして、古代ギリシア・ローマ社会の書簡理論家たちの書簡理論に関する記述をギリシア語・ラテン語の原文と英訳の対比版で出版した。また、その序文でデメトリオス、キケロ、セネカ、フィロストラトス、ナジアンザスのグレゴリオス、リバニオス、ヴィクトリオス、ボローニャ・パピルスについて解説するばかりでなく「書簡理論と修辞学」の関係について言及し、ギリシア・ローマ社会の「学校での書簡作法」の教育について言及した。³⁴

S.K.スタワースは、偽デメトリオスの21書簡類型と偽リバニオスの41書簡類型の中で、アリストテレスの弁論の3類型「法廷弁論」「議会(助言)弁論」「演説弁論」の区分を準用して、「友情の手紙」「称賛と非難の手紙」「勧告と助言の手紙(さらに、勧告・助言・勧奨・忠告・叱責・慰めなどの下位ジャンルに分かれる)」「仲介の手紙(紹介・推薦)」「告訴、弁護、陳述の手紙」に分け、³⁵ ギリシア・ローマの哲学者や著作家の手紙、パピルスの手紙、教父の手紙の具体例を挙げ、新約聖書の手紙の一部にこれらの要素が見られることを同時に指摘した。³⁶

D.オーニーは、新約聖書をギリシア・ローマ社会とユダヤ教社会という周辺世界の文学的状況に位置づける中で、新約聖書の書簡を「状況の手紙」(occasional letters)と「釈義的説教」(homily)に分けて、「状況の手紙」として第一テサロニケ書を「勧告の手紙」、ガラテヤ書を「勧奨の手紙」、第二コリント書を「和解の手紙」(1-7章)「助言の手紙」(8-9章)「弁明の手紙」(10-13章)の「複合の手紙」、フィリピ書を「感謝と勧告の手紙」、フィレモン書を「推薦の手紙」、ヘブライ書を「称賛の説教」に分類し、「釈義的説教」としてローマ書を挙げ、また共同書簡の代表的な例として第一ペトロ書を「勧告的回状」に分類した。³⁷

これらの書簡理論の研究によって、ギリシア・ローマの書簡との比較の中で、新約聖書の書簡の本体全体の意義と類似表現によるモチーフへの理解が進んでいったが、本体の細部への解明には至らなかった。

7. 修辞学的研究

これらの動向と呼応して、第二の文学批評の潮流として、文学的技法に関しては、1960年代末から70年代初頭にA.N.ワイダー、J.ムイレンバーク、W.A.ピアズリーらによってギリシア・ローマ時代の修辞学を用いた批評的研究の端緒が示され、³⁸ 70年代末から80年代までH.D.ベッツ、G.A.ケネディー、W.ヴェルナーの三者が牽引車となって現在まで爆発的な勢いで研究が展開されている。

H.D.ベッツは、ギリシア・ローマ時代の修辞学を用いて、ガラテヤ書の注解書を書いて、それを法廷弁論の「弁明の演説」であるとし、修辞学的批評の潮流を形成した。³⁹ しかし、ガラテヤ書5, 6章は弁論のタイプにはない書簡理論の「勧告」と分析して、H.ヒュプナーやJ.クラッセンから弁論と書簡理論を混同させたと批判された。⁴⁰ また、ベッツは第二コリント書 8-9章の注解書で修辞学的分析を徹底させ。⁴¹ その弟子のM.ミッチェルは第一コリント書の書簡分析を展開した。⁴²

W.ヴェルナーは、1970年代以降にドイツでの修辞学の復権に着目し、ラウスバークらの古典修辞学の成果とペレルマンとオルブレヒツ・テュテカなどの現代修辞学の視点を併せ用いて、一連の論文で主にパウロ書簡に修辞学的批評を導入して分析した。⁴³ また、その弟子のL.トゥーレンは、第一ペトロ書、ヤコブ書、ガラテヤ書などの修辞学的批評を展開した。⁴⁴

G.ケネディは新約学者ではなく、アリストテレス、キケロ、クインティリアーナスを始めとして古代から中世にいたるまでのキリスト教の修辞学の著書を著した西洋古典の修辞学者であるが、西洋古典の修辞学を新約

聖書にも適用して、『新約聖書の修辭学的批評』をも著した。⁴⁵ その弟子のD.ワトソンは、第二ペトロ書・ユダ書、ヨハネ書、パウロ書簡などの修辭学的批評を展開した。⁴⁶

1990年代の修辭学的批評の推進力となったのは、一方では、ヴェルナーの方法論を推進するT.H.オールブライトやJ.ヘスターらが推進してきた修辭学的批評国際研究集会であり、⁴⁷ またその潮流から派生してきた研究であり、⁴⁸ 他方ではその潮流と呼応しつつV.K.ロビンズが推進する社会修辭学的批評⁴⁹ やE.シュスラー・フィオーレンツァが推し進める政治修辭学的批評である。⁵⁰

こうして、主としてパウロ書簡を中心的に修辭学的批評が進められてきたが、手紙の前書き(差出人、受取人、祝福の祈り)と後書き(挨拶、祝福の祈り)以外の手紙全体の構造が修辭学的視点で分析されるようになった。⁵¹

8. 結びに

今日では、新約聖書の書簡は、一方では書簡理論の影響を受けたものであり、他方ではギリシア・ローマの修辭学の文学的技巧を駆使したヘレニズム・ローマ期の書簡文学であることが明らかにされている。すなわち、新約聖書の書簡は、ギリシア・ローマの著作家の書簡文学や教父文書の書簡に連続した構造やモチーフを持った書簡文学と位置づけられるのである。今日の研究では、オーファベックやダイスマンのテーゼは既に覆されており、それらを前提にした様式史的研究は書簡理論的研究や修辭学的研究に置き換えられているのである。

-
- * 本稿は、2009年3月27日に聖学院大学で開催された日本基督教学会関東支部会で発表した原稿に多少手を加えたもので、福音書のジャンル批評に関する拙稿「福音書は伝記文学か？」(佐藤研編『経験としての聖書：大貫隆教授献呈論文集(聖書学論集第41号)』日本聖書学研究所、2009年3月、281-294頁)と対をなす。また、本稿は、科学研究費補助金基盤研究C「新約聖書におけるヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学の修辭学的研究」(2007~2010年度)の成果の一部である。
- 1 2世紀半ばにマルキオンはルカ福音書(「福音」)と、牧会書簡を除く10通のパウロ書簡(「使徒」)で構成された新約聖書の原型を形作ったが、それに対して2世紀末の反マルキオン序文やムラトリ正典目録によると、正統派では四福音書・使徒言行録と13通のパウロ書簡で構成された正典化の過程にあった。その中で4世紀始めのエウセビオス以来、パウロ書簡とヘブライ書の14通を「パウロ書簡」とし、それ以外の7通を「公同書簡」とする慣習が出来上がっていった。

- 2 ルターはヘブライ書の著者がパウロではなくアポロによるとし、古代に論争されていた著者問題を復活させた。
- 3 エフェソ書の著者問題は古代教会でも議論されていたが、エラスムスがエフェソ書の文体からパウロ以外の人物が著者であることを指摘して、近現代のパウロ書簡の著者問題の発端の一つとなった。19世紀後半のF. C. Baurとテュービンゲン学派では真正のパウロ書簡をガラテヤ書、I・IIコリント書、ローマ書の四大書簡に限っていたが、20世紀初頭から現在に至るまでそれらに、Iテサロニケ書、フィリピ書、フィレモン書を加えた7通が真正なパウロ書簡であるという見解が広く受け入れられている。従って、伝統的な「獄中書簡」(フィリピ書、コロサイ書、エフェソ書、牧会書簡)という概念も崩れている。私は従来の「パウロ書簡」を真正の「パウロ書簡」(上述の7通)、「第二パウロ書簡」(IIテサロニケ書、コロサイ書、エフェソ書)と「牧会書簡」(I・IIテモテ書、テトス書)の三つのカテゴリーに分ける。
- 4 P. Vielhauer, "Franz Overbeck und die neutestamentliche Wissenschaft," *Evangelische Theologie* 10 (1950/51), 193-207 = idem, *Aufsätze zum Neuen Testament*, München: Chr. Kaiser Verlag, 1965, 235-252.
- 5 F. Overbeck, "Über die Anfänge der patristischen Literatur," *Historische Zeitschrift* 12 (1882), 417-472.
- 6 F. Nietzsche, *Zur Genealogie der Moral*, Leipzig: Verlag C. G. Naumann, 1887 = 『道徳の系譜』岩波文庫、1964年。
- 7 A. Deissmann, *Licht vom Osten: Das Neue Testament und die neuentdeckten Texte der hellenistisch-römischen Welt*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1923 (4.Aufl.; 1.Aufl. 1908), 116-119, 193-196.
- 8 Deissmann, *Licht vom Osten*, 196-198.
- 9 Deissmann, *Licht vom Osten*, 198-208.
- 10 Deissmann, *Licht vom Osten*, 208-213.
- 11 K. Kautsky, *Der Ursprung des Christentum: Eine historische Untersuchung*, Stuttgart: H. W. Dietz Nachf., 1922 = 『キリスト教の起源』法政大学出版局、1975年。
- 12 M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1976, 293 = 『宗敎社会学』(『経済と社会』第2部第5章) 創文社、1976年、125頁、145頁にはヴェーバーのニーチェ批判とカウツキー批判が見られる。
- 13 M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1919; R. Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1921.
- 14 M. Dibelius, "Zur Formgeschichte des Neuen Testaments (ausserhalb der Evangelien)," *Theologische Rundschau* 3 (1931), 207-242. Cf. P. Wendland, *Die urchristlichen Literaturformen*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1912.
- 15 O. Roller, *Das Formular der paulinischen Briefe: Ein Beitrag zur Lehre vom antiken Briefe*, Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag, 1933. Cf. T. Y. Mullins, "Greeting as New Testament Form," *Journal of Biblical Literature* 88 (1968), 418-426; G. J. Bahr, "The Subscriptions in the Pauline Letters," *Journal of Biblical Literature* 87 (1968), 27-41.
- 16 G. H. Boobyer, "Thanksgiving" and "Glory of God" in Paul, Leipzig: Noske, 1929.
- 17 L. G. Champion, *Benedictions and Doxologies in the Epistles of Paul*, Oxford: Kemp Hall, 1934.

- 18 P. Schubert, *Form and Function of the Pauline Thanksgivings*, Berlin: Töpelmann, 1939.
Cf. J. T. Sanders, "The Transition from Opening Epistolary Thanksgiving to Body in the Letters of the Pauline Corpus," *Journal of Biblical Literature* 81 (1962), 348-362; P. O'Brien, *Introductory Thanksgivings in the Letters of Paul*, Leiden: Brill, 1977; P. Arzt, "The Epistolary Introductory Thanksgiving in the Papyri and in Paul," *Novum Testamentum* 36 (1994), 29-46; J. Reed, "Are Paul's Thanksgivings 'Epistolary'?", *Journal for the Study of the New Testament* 61 (1996), 87-99.
- 19 T. Y. Mullins, "Petition as a Literary Form," *Novum Testamentum* 5 (1962), 46-54; idem, "Disclosure: A Literary Form in the New Testament," *Novum Testamentum* 7 (1964), 44-50.
- 20 C. J. Bjerkelund, *PARAKALŌ: Form, Funktion und Sinn der parakalō-Sätze in den paulinischen Briefen*, Oslo: Universitetsforlaget, 1967; R. Jewett, "The Form and Function of Homiletic Benediction," *Anglican Theological Review* 51 (1969), 13-34.
- 21 K. Weidinger, *Die Haustafeln: Ein Stück urchristlicher Paränese*, Leipzig: J. C. H. Hinrichs, 1928; D. Schroeder, *Die Haustafeln des Neuen Testaments (ihre Herkunft und Theologischer Sinn)*, Hamburg (diss.), 1959; idem, "Lists, Ethical," *Interpreter's Dictionary of the Bible*, supp. vol. (1976), 546-547; J. E. Crouch, *The Origins and Intentions of the Colossian Haustafel*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972; D. Lührmann, "Neutestamentliche Haustafeln und antike Ökonomie," *New Testament Studies* 27 (1980-81), 83-97; D. L. Balch, *Let Wives Be Submissive: The Domestic Code in 1 Peter*, Chico: Scholars Press, 1981; K. Müller, "Die Haustafel des Kolosserbriefes und das antike Frauenthema," G. Dautzenberg et al. (eds.), *Die Frau im Urchristentum*, Freiburg: Herder & Herder, 1983, 263-319; L. Hartman, "Some Unorthodox Thoughts on the 'Household-Code Form,'" J. Neusner et al. (eds.), *The Social World of Formative Christianity and Judaism: Essays in Tribute to Howard Clark Kee*, Philadelphia: Fortress Press, 1988, 219-232.
- 22 A. Vögtle, *Die Tugend- und Lasterkataloge im Neuen Testament: Exegetisch, religions- und formgeschichtlich untersucht*, Münster: Aschendorff, 1936; S. Wibbing, *Die Tugend- und Lasterkataloge im Neuen Testament und ihre Traditionsgeschichte unter besonderer Berücksichtigung der Qumran-Texte*, Berlin: Töpelmann, 1964; E. Kamlah, *Die Form der katalogischen Paränese im Neuen Testament*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1964; P. Borgen, "Catalogues of Vices, The Apostolic Decree, and the Jerusalem Meeting," Neusner et al. (eds.), *The Social World*, 126-141.
- 23 W. G. Doty, *Letters in Primitive Christianity*, Philadelphia: Fortress Press, 1973; J. L. White, "New Testament Epistolary Literature in the Framework of Ancient Epistolography," W. Haase (Hrg.), *Aufstieg und Niedergang der römische Welt* II. 25. 2 (1984), 1730-1756; idem, J. L. White, *Light from Ancient Letters*, Philadelphia: Fortress Press, 1986.
- 24 M. L. Stirewalt, "The Form and Function of the Greek Letter Essay," K. P. Donfried (ed.), *The Romans Debate: Revised and Expanded Edition*, Peabody: Hendrickson Publishers, 1991 (Orig. ed. 1977), 147-171; idem, *Paul the Letter Writer*, Grand Rapids: Eerdmans, 2003.
- 25 F. Schnider & W. Stenger, *Studien zum neutestamentlichen Briefformular*, Leiden: E. J. Brill, 1987; J. A. D. Weima, *Neglected Endings: The Significance of the Pauline Letter Closings*, Sheffield: JSOT Press, 1994.

- 26 K. Berger, "Hellenistische Gattungen im Neuen Testament," *Aufstieg und Niedergang der römische Welt* II. 25. 2 (1984), 1031-1432, bes. 1132-1145, 1326-1363.
- 27 U. Schnell, *Einleitung in das Neue Testament* (4. Aufl.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2002 (1. Aufl., 1994), 53-60, 64, 79-80, 96-97, 118-120, 136-138, 157-158, 169, 338-339, 354-355, 367-368, 383-386, 451-453, 464-465, 472-473, 488-489, 493-494. ただし、ヘブライ書、ヤコブ書、第一ヨハネ書は、この書簡構造の枠組みに従っていないと分析する (*Einleitung*, 416-418, 436-438, 504-505)。
- 28 E.g., S. J. Case, *The Social Origins of Christianity*, Chicago: Chicago University Press, 1923.
- 29 E. A. Judge, "The Early Christians as a Scholastic Community," *Journal of Religious History* 1 (1960), 4-15; idem, "St. Paul and Classical Society," *Jahrbuch für Antike und Christentum* 15 (1972), 19-36; cf. idem, *The Social Pattern of the Christian Groups in the First Century*, London: Tyndale Press, 1960.
- 30 G. Theissen, "Wanderradikalismus: Literatursoziologische Aspekte der Überlieferung von Worten Jesu im Urchristentum," *Zeitschrift für Theologie und Kirche* 70 (1973), 245-271 = idem, *Studien zur Soziologie des Urchristentums*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1983 (1979), 79-105; idem, "Legitimation und Lebensunterhalt: Ein Beitrag zur Soziologie urchristlicher Missionare," *New Testament Studies* 21 (1974/75), 192-221 = idem, *Studien zur Soziologie*, 201-230; idem, "Soziale Schichtung in der korinthischen Gemeinde: Ein Beitrag zur Soziologie des hellenistischen Urchristentums," *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft* 65 (1974), 232-272 = idem, *Studien zur Soziologie*, 231-271; idem, "Soziale Integration und sakramentales Handeln: Eine Analyse von 1 Cor. XI 17-34," *Novum Testamentum* 16 (1974), 179-206 = idem, *Studien zur Soziologie*, 290-317; idem, "Die Starken und Schwachen in Korinth: Soziologische Analyse eines theologischen Streites," *Evangelische Theologie* 35 (1975), 155-172 = idem, *Studien zur Soziologie*, 272-289.
- 31 W. A. Meeks, *The First Urban Christians: The Social World of the Apostle Paul*, New Haven: Yale University Press, 1983, esp. ch.2 "The Social Level of the Pauline Christians," 50-73, 214-220 = 『古代都市のキリスト教—パウロ伝道圏の社会学的研究』ヨルダン社、1989年、特に第2章「パウロ教会の教会員たちの社会層」144-204頁。
- 32 H. Koskeniemi, *Studien zur Idee und Phraseologie des griechischen Briefes bis 400 n. Chr.*, Helsinki: Akateeminen Kirjakauppa, 1956. 「仲介の手紙 (紹介・推薦)」に関しては、cf. C. W. Keyes, "The Greek Letter of Introduction," *American Journal of Philology* 56 (1935), 28-44; C.-H. Kim, *The Familiar Letter of Recommendation*, Missoula, Scholars Press, 1972.
- 33 K. Thraede, *Grundzüge griechisch-römischer Brieftopik*, München: C. H. Beck, 1970.
- 34 A. J. Malherbe, *Ancient Epistolary Theorists*, Atlanta: Scholars Press, 1988 (Orig. in *Ohio Journal of Religious Studies* 5 [1977], 3-77); cf. idem, *Moral Exhortation A Greco-Roman Sourcebook*, Philadelphia: The Westminster Press, 1986.
- 35 「称赞と非難の手紙」は「演示弁論」の下位ジャンルに、「勧告ないしは助言の手紙」は「議会弁論」の下位ジャンルに、「告訴と弁護の手紙」は「演示弁論」の下位ジャンルに対応しているが（「陳述」はそれらの一部分）、「友情の手紙」と「仲介の手紙」は3種類の弁論に対応しない書簡に元来ある固有な区分である。

- 36 S. K. Stowers, *Letter Writing in Greco-Roman Antiquity*, Philadelphia: The Westminster Press, 1986; cf. idem, "Social Typification and the Classification of Ancient Letters," Neusner et al. (eds.), *The Social World*, 78-90.
- 37 D. E. Aune, *The New Testament in Its Literary Environment*, Philadelphia: The Westminster Press, 1987.
- 38 A. N. Wilder, *The Language of the Gospel: Early Christian Rhetoric*, London: SCM/New York: Harper & Row = *Early Christian Rhetoric: The Language of the Gospel*, Cambridge: Harvard University Press, 1971, J. Mulenburg, "Form Criticism and Beyond," *Journal of Biblical Literature* 88 (1969), 1-18; W. A. Beardslee, *Literature Criticism of the New Testament*, Philadelphia: Fortress Press, 1970 = 土屋博訳『新約聖書と文学批評』ヨルダン社、1983年。
- 39 H. D. Betz, "The Literary Composition and Function of Paul's Letter to the Galatians," *New Testament Studies* 21 (1975), 353-379 = M.D.Nanos (ed.), *The Galatians Debate*, Minneapolis: Fortress Press, 2003, 3-28; idem, *Galatians: A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia*, Philadelphia: Fortress Press, 1979.
- 40 H. Hüner, "Der Galaterbrief und das Verhältnis von antiker Rhetorik und Epistolographie," *Theologische Literaturzeitung* 109 (1984), 241-250; J. Classen, "Paulus und die Rhetorik," *Zeitschrift für neutestamentliche Wissenschaft* 82 (1991), 1-33; idem, "St Paul's Epistle and Ancient Greek and Roman Rhetoric," S.E. Porter and T.H. Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1993, 265-291 = Nanos, *The Galatians Debate*, 73-94.
- 41 H. D. Betz, *2 Corinthians 8 and 9: A Commentary on Two Administrative Letters of the Apostle Paul*, Philadelphia: Fortress Press, 1985; idem, "The Problem of Rhetoric and Theology according to the Apostle Paul," A. Vanhoye (ed.), *L' Apôtre Paul: Personnalité, style et conception du ministère*, Leuven: Peeters, 1986, 16-48.
- 42 M. M. Mitchell, *Paul and Rhetoric of Reconciliation: An Exegetical Investigation of the Language and Composition of 1 Corinthians*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1991.
- 43 W. Wuellner, "Paul's Rhetoric of Argumentation in Romans: An Alternative to the Donfried-Karris Debate over Romans," *Catholic Biblical Quarterly* 38 (1976), 330-351 = Donfried (ed.), *The Romans Debate*, 128-146; idem, "Der Jakobusbrief im Licht der Rhetorik und Textpragmatik," *Linguistica Biblica* 43 (1978), 5-66; idem, "Greek Rhetoric and Pauline Argumentation," W. R. Schoedel & R. L. Wilkin (eds.), *Early Christian Literature and the Classical Intellectual Tradition: In Honorem Robert M. Grand*, Paris: Editions Beauchesne, 1979, 177-188; idem, "Paul as Pastor: The Function of Rhetorical Questions in First Corinthians," Vanhoye (ed.), *L' Apôtre Paul*, 49-77; idem, "Where is Rhetorical Criticism Taking Us?" *Catholic Biblical Quarterly* 49 (1987), 448-467; idem, "The Argumentative Structure of 1 Thessalonians as Paradoxical Encomium," R. F. Collins (ed.), *The Thessalonian Correspondence*, Leuven: Peeters, 1990, 17-137; idem, "Der vorchristliche Paulus und die Rhetorik," S. Lauer & H. Ernst (Hrg.), *Tempelkult und Tempelzerstörung: Festschrift für Clements Thoma zum 60. Geburtstag*, Bern: Peter Lang, 1995, 133-165.
- 44 L. Thurén, *The Rhetorical Strategy of 1 Peter: With Special Regard of Ambiguous Expressions*, Åbo: Åbo Academy, 1980; idem, *Argument and Theology in 1 Peter: The Origin of Christian Paraenesis*, Sheffield, Sheffield Academic Press, 1995; idem, "Risky Rhetoric

- in James?" *Novum Testamentum* 37 (1995), 262-284; idem, "Hey Jude! Asking for the Original Situation and Message of a Catholic Epistle," *New Testament Studies* 43 (1997), 451-465; idem, "Was Paul Sincere? Questioning the Apostle's Ethos," *Scriptura* 65 (1998), 95-108; idem, *Derhetorizing Paul: A Dynamic Perspective on Pauline Theology and the Law*, Tübingen: J. C. B. Mohr, 2000.
- 45 G. A. Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1984. Cf. D. F. Watson (ed.), *Persuasive Artistry: Studies in New Testament Rhetoric in Honor of George A. Kennedy*, Sheffield: JSOT Press, 1991.
- 46 D. F. Watson, *Invention, Arrangement and Style: Rhetorical Criticism of Jude and 2 Peter*, Atlanta, 1988; idem, "A Rhetorical Analysis of Philippians and Its Implications for the Unity Question," *Novum Testamentum* 30 (1988), 57-88; idem, "A Rhetorical Analysis of 3 John: A Study of Epistolary Rhetoric," *Catholic Biblical Quarterly* 51 (1989) 479-501; idem, "1 Corinthians 10:23-11:1 in the Light of Greco-Roman Rhetoric: The Role of Rhetorical Questions," *Journal of Biblical Literature* 108 (1989), 301-318; idem, "A Rhetorical Analysis of 2 John According to Greco-Roman Convention," *New Testament Studies* 35 (1989), 104-130; idem, *Rhetorical Criticism of the Bible: A Bibliographic Survey*, St. Louisville: Deo Publishing, 2003.
- 47 S. E. Porter & T. H. Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: JSOT Press, 1993; S. E. Porter & T. H. Olbricht, *Rhetoric, Scripture and Theology: Essays from the 1994 Pretoria Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996; S.E.Porter & T.H.Olbricht (eds.), *Rhetorical Analysis of Scripture: Essays from the 1995 London Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1997; S. E. Porter & D. L. Stamps (eds.), *Rhetorical Interpretation of Scripture: Essays from the 1996 Malibu Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999; S.E.Porter & D. L. Stamps (eds.), *Rhetorical Criticism and the Bible: Essays from the 1998 Florence Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002; T.H.Olbricht & W. Überlacker (eds.), *Rhetorical Argumentation in Biblical Texts: Essays from the 2000 Lund Conference*, London/New York: T. & T. Clark International, 2002; T. H. Olbricht & A. Eriksson, *Rhetoric, Ethic and Moral Persuasion in Biblical Discourse: Essays from the 2002 Heidelberg Conference*, London /New York: T. & T. Clark International, 2005.
- 48 L. G. Bloomquist & L. G. Carey (eds.), *Vision and Persuasion: Rhetorical Dimension of Apocalyptic Discourse*, Atlanta: Chalice Press, 1998; J. D. H. Amador, *Academic Constraints in Rhetorical Criticism of the New Testament: An Introduction to a Rhetoric of Power*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1999; idem, "Revisiting 2 Corinthians: Rhetoric and the Case for Unity," *New Testament Studies* 46 (2000), 92-111; T.H.Olbricht & J. L. Sumney (eds.), *Paul and Pathos (SBL Symposium)*, Atlanta: Society of the Biblical Literature, 2001; D. F. Watson (ed.), *The Intertexture of Apocalyptic Discourse in the New Testament*, Leiden: Brill, 2002; C. J. Classen, *Rhetorical Criticism of the New Testament*, Leiden: Brill, 2002; J. D. H. Amador & J. Hester, *Rhetorics and Hermeneutics: Wilhelm Wuellner and His Influence*, London/New York, T. & T. Clark International, 2004; F. J. Long, *Ancient Rhetoric and Paul's Apology*, Cambridge: Cambridge University Press, 2004; 山田耕太『新約聖書と修辞学：パウロ書簡とルカ文書の修辞学的・文学的研究』キリスト教図書出版社、2008年; J. P. Samplly, *Paul and the Rhetoric*, London/New York: T. & T. Clark, 2009.

- 49 V. K. Robbins, *The Tapestry of Early Christian Discourse: Rhetoric, Society and Ideology*, London: Routledge, 1996; idem, *Exploring the Texture of Texts: A Guide to Socio-Rhetorical Interpretation*, Valley Forge: Trinity Press International, 1996; D. B. Gowler, L. G. Bloomquist and D. F. Watson (eds.), *Fabrics of Discourse: Essays in Honor of Vernon K. Robbins*, Valley Forge: Trinity Press International, 2003.
- 50 E. S. Fiorenza, *Rhetoric and Ethic: The Politics of Biblical Studies*, Minneapolis: Augsburg Fortress, 1999; cf. L. L. Welborn, *Politics and Rhetoric in the Corinthian Epistles*, Macon: Mercer University Press, 1998.
- 51 Cf. D. Dormeyer, *The New Testament among the Writings of Antiquity*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1998 (German Orig. 1993), ch.9 "The Letters"; S. E. Porter, "Chapter 18: Paul of Tarsus and His Letters," S. E. Porter (ed.), *Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period 330B.C.-A.D.400*, Leiden: Brill, 1997, 533-585; L. Thurén, "Chapter 19: The General New Testament Writings," Porter (ed.), *Handbook*, 589-607; D. L. Stamps, "Chapter 20: The Johannine Writings," Porter (ed.), *Handbook*, 609-632; 山田耕太「ガラテア書の修辞学的分析：プロギュムナスマタの新しい視点から見て(1)」『敬和学園大学研究紀要』第13号(2004年), 15-31頁; 同「ガラテア書の修辞学的分析：プロギュムナスマタの新しい視点から見て(2)」『新約学研究』第32号(2004年), 52-66頁; 同「フィリピ書の修辞学的分析：演示弁論の視点から見た文学的問題(1)」『敬和学園大学研究紀要』第14号(2005年), 37-81頁; 同「フィリピ書の修辞学的分析：演示弁論の視点から見た文学的問題(2)」『新約学研究』第33号(2005年), 18-34頁; 同「第一コリント書1-4章の修辞学的分析：神学議論としてのアイロニー(1)」『敬和学園大学研究紀要』第15号(2006年), 17-27頁; 同「第一コリント書1-4章の修辞学的分析：神学議論としてのアイロニー(2)」『敬和学園大学研究紀要』第16号(2007年), 17-33頁; 同「ローマ書の修辞学的分析」『新約学研究』第36号(2008年), idem, "Is Romans an Ambassadorial Letter?" K. K. Yeo (ed.), *Paul, Romans and the World*, Trinity Press International, forthcoming, 17-31頁; 同「ヘブライ書の修辞学的分析」『新約学研究』第37号(2010年), 所収予定; 同「ギリシア・ローマ時代のリベラル・アーツ教育と修辞学」『敬和学園大学研究紀要』第17号, 2008年, 217-231頁; 同「フィロンにおけるパイディア」『敬和学園大学研究紀要』第18号, 2009年, 223-233頁; 「フィロンにおける修辞学」『新約学研究』第37号, 2009年, 5-22頁; 同「フィロンにおける哲学」, 近刊予定, 参照。